

# まちなか大谷石で魅力発見！

## 宇都宮大学 大谷石魅力発見班

### 1 提案の要旨

#### 【目標】

宇都宮市の中でも特に人目につく場所に大谷石を設置し、大谷石の認知度を高め、その魅力をアピールする。そうすることで長期的には大谷地域での観光客の増加を目指す。

#### 【現状と課題】

- ・ 大谷地域は安全面等の問題から観光客が減少している
- ・ 県外において大谷石に対する認知度が低い
- ・ 中心市街地において既存の大谷石の建造物は分散しており、観光資源としてのアピールは難しい

#### 【施策事業の提案】

大谷石の新たな魅力を知ってもらい、認知度の向上を図るために以下の事業を提案する。

- ・ JR 宇都宮駅前を流れる田川周辺での大谷石製の照明・時計塔・階段の設置
- ・ 八幡山公園内の日本庭園に大谷石製の照明を設置

### 2 提案の目標

宇都宮市において、大谷石は古くから採掘・利用されてきた。近年、大谷地域の観光客入込数の減少傾向が続き、また老朽化や区画整備などによって既存の大谷石の建造物が失われていく一方、この素材を見直す動きも出てきている。宇都宮市においても、大谷石を観光・建築材等に活用することに関しては前向きな姿勢を示している。大谷石を活用した事業を多くの人目に触れる場所で行うことで住民や来訪者の大谷石に対する認知度を高め、宇都宮市の観光資源としての大谷石の価値向上を目指すことを目標とする。

また事業を通して大谷石製品や建造物、石そのものの魅力を発見してもらい、注目を集めることで長期的には大谷地域への観光客増加を狙う。

### 3 現状の分析と課題

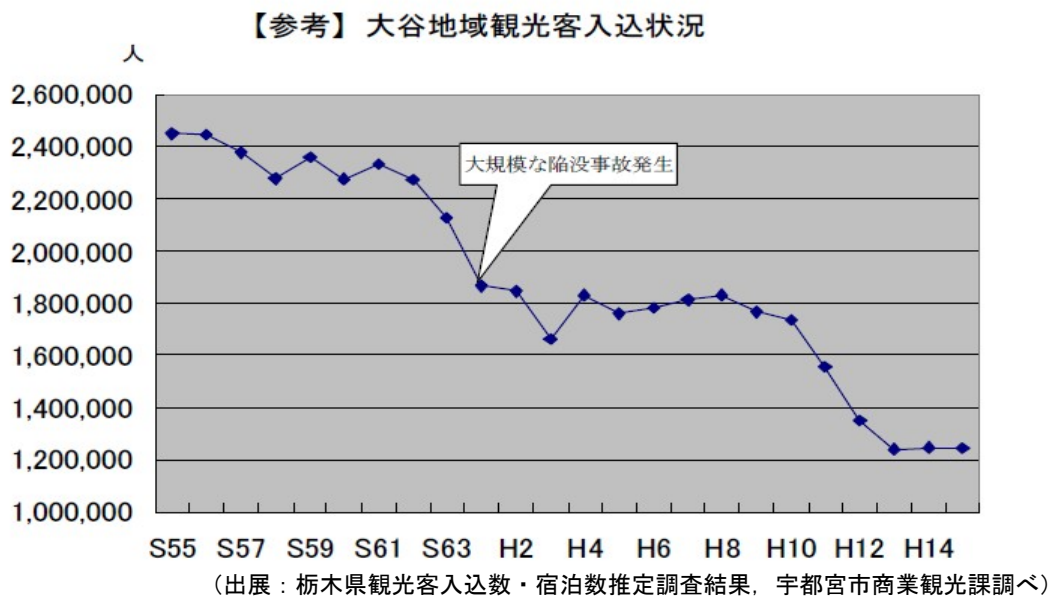
#### 3.1 大谷地域について

大谷地域において特に問題なのは、大谷は危険であるという認識が全国的にあるという点である。大谷地域では横坑・残柱式坑内採取方式で採掘が盛んに進められたため、あちこちに地下空洞が残った。空洞の大きさは東京ドーム16杯分といわれ、これほどの規模は全国にも例がない。平成元年にはこの地下空洞が原因で大規模陥没事故が起き、安全面での不安定さを露呈した。この事故が全国的に報道されたことにより、大谷地域は危険であるという認識が広まった。陥没事故はその後も発生している。

しかし採石法によると、採掘を行った事業者は掘った穴を埋め戻すという作業を義務付けられておらず、採掘を行った場所に対し2年間しか責任をもたない。またそもそも採掘の許可は県が出していたこともあり、責任の主体がどこにあるのか曖昧で埋め立て等の地下空洞対策についてはあまりめどが立っていない。土砂での埋め立てには多額の費用が必要なため、実現性可能性は低い。また、市が特区申請により進めようとしている溶融スラグの埋め立てについては地元住民からの反対の声が多い。

平成元年の大規模陥没によって、観光客数も減少した(図表1)。観光客は昭和61年以降減少傾向にあるが、平成元年の大陥没やその後の小規模陥没、埋め戻した土地の地盤沈下等が続いたのが原因でさらに落ち込みが続いている。かつての活気を取り戻そうと陥没事故以降もイベント等が行われているが、客足は遠のいたままの状態である。やはり安全面の不安が大きな要因と思われる。

図表1



#### 3.2 大谷石の認知度について

大谷石を観光資源として活用する場合、その認知度は現状でどの程度なのか。宇都宮市が平成14年度に行った「宇都宮市都市観光振興プラン策定調査」によると、近隣1都4県における大谷石の認知度は約18.3%となっている。しかしその詳細を見てみると、茨城県の認知度が31.4%と高く、その他東京と神奈川では約10%にとどまっている。つまり、茨城県における高い認知度が全体の認知度を18.3%まで押し上げているのであって、その他の地域においては大谷石の認知度は低いということがうかがえる。また同調査によれば、大谷地域の観光の中心となり得る大谷資料館は7.9%、大谷平和観音は6.2%と、認知度はあまり高くない。

### 3.3 宇都宮中心地に存在する大谷石の建造物の状況

大谷石建造物は市中心部においても存在しているが、近年区画整理の際に大谷石の建造物も一緒に取り壊されたり、安い輸入物の石塀に取って代わられたりするなどして、現在その数を急速に減らしている。

こうした中、市では市内に残る大谷石建造物をアピールしようという目的で、「石の街うつのみやー景観・建築マップー」を作成しているが、広域に分散しているがゆえに見て回るには困難である。また大谷石は古くから民家の石塀や倉庫等に使用され生活に密着してきたため、一つ一つの建造物には魅力があるとはいえ、市民にとっては大谷石を使用した建造物＝日常の風景としての認識にとどまっていると思われる。それが大谷石の建造物を本市特有の風景として保存・活用しようとする動きが少ない要因の一つではないかと考えている。

### 3.4 新たな活用による大谷石の魅力

一方では、近年大谷石が持つ魅力に再び注目が集まっている。大谷地域で行われているフェスタ in 大谷では、今年から「大谷夢あかり」というイベントが行われている。その内容は、大谷景観公園の一枚岩の周りを、大谷石製キャンドルスタンドで埋め尽くすというものである。1,000個にも及ぶキャンドルの光は大谷景観公園の奇岩群と相まって、見る者を神秘的な気持ちにすると大変好評であった。このイベントを企画した実行者たちは、「来年はさらにすごいイベントにする」と意気込んでいる。

また中心地においては、市の助成事業もあり外装・内装を大谷石で装飾する建物（写真1,2）が増えている。こうした建物は、洗練された印象を与えこれまでの大谷石とは違った魅力を感じさせる。



写真1 市内飲食店の内装

写真2 中心地にある大谷石を使用したビル

### 3.5 課題

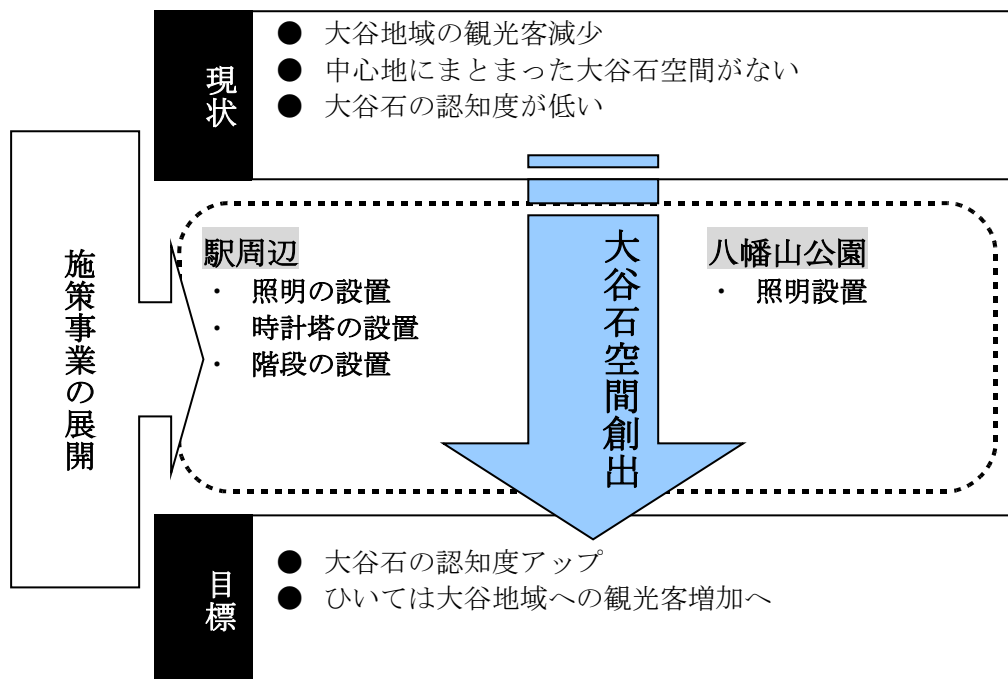
- ①大谷地域は安全面等の問題もあり、現在のままでは大谷地域への観光客の増加は難しい
- ②大谷石の認知度が低い
- ③宇都宮の中心地に存在する大谷石の建造物は、数が多いが集積しておらず、また生活に密着しているゆえに魅力が埋没してしまっている

これらより、まずは大谷石という素材に住民・来訪者の注目を集め、その魅力を発見してもらうことが第一であると考えた。

また、今回の提案では長期的には大谷地域への観光客増を目指している。そのためには大谷地域の観光推進の障がいとなっている安全面の不安を解決する必要がある。住民や事業者との息の長い話し合いが必要になることは明らかであるが、それを頓挫させないという点においても、大谷石の有効性・将来性を示唆するような取り組みは有効であると考えます。

## 4 施策事業の提案

<今提案のイメージ図>



### 4.1 宇都宮駅西口前の田川プロムナードでの大谷石配置

#### 4.1.1 駅西口前田川プロムナードでの大谷石配置のメリット

今回論文中でいう田川プロムナードとは、JR 宇都宮駅西口前を流れる田川沿いの散歩道を指す。JR 宇都宮駅は市内でも非常に多くの人が集まる場所であり、駅西口は宇都宮の顔とも

言える場所である。中心地には東武宇都宮駅も存在するが、利用者数は東武宇都宮駅が約11,000人であるのに対し、JR宇都宮駅は約36,000人とJR宇都宮駅の方が多い。JR宇都宮駅に大谷石を設置できれば、多くの人々の目に触れる機会が増え、関心を引く事ができる。

また、JR宇都宮駅東口では現在大規模な拠点整備事業が進行中である。駅東と駅西は距離があるが、この事業によって往來の利便性は高まり、往來は活発になると予想される。駅西には商業施設が駅東と比較して多いため、往來の利便性の高まりにより、ビジネスホテルが多い駅東から駅西へと、ホテル宿泊者が流れやすくなると予想される。このことから宇都宮の駅西口は、今回の大谷石を人目につく場所に設置し認知度を高めるといった目的に適していると判断した。

#### 4. 1.2 事業を行う場合の主体について

今回の提案で着目した市内を通る田川は一級河川であり、その管理は栃木県が行っている。しかし栃木県策定の「一級河川 利根川水系 田川圏域河川整備計画」によれば、田川を全て県が管理するというわけではない。また宇都宮市は市内における河川の扱いについて、「国・県が管理する一級河川とも調整を図る」と定めている。したがって、今回の事業は、宇都宮市が独自に進めるのではなく、宇都宮市が栃木県へ提案し調整を行う、という形式の提案とする。

#### 4. 1.3 事業内容

今回の提案では効率よく大谷石を露出することを考慮し、田川プロムナードの中でも特に宮の橋近辺に焦点を当て、以下の3つを提案する。

- I. 田川プロムナードでの大谷石製照明の配置
- II. 宮の橋での時計塔の配置
- III. 宮の橋から田川プロムナードへ続く階段の配置

##### I. 田川プロムナード両岸での大谷石製照明の設置

田川プロムナードにおける課題のひとつとして夜間に暗いことが挙げられる。プロムナード上には照明が存在しないので、駅前で人通りが多いにもかかわらず夜中に一人で歩くには不安を感じる暗さの場所となっている。

そこで大谷石製の照明を配置することを提案する。大谷石の持つ温かみと光の組み合わせは、先述のフェスタ in 大谷での大谷夢あかりイベントでも評価が高く、照明の素材として大谷石は適当である。大谷石製照明を両岸に配置することで現状のような不安を感じるような場所ではなく、大谷石製照明の明かりによるムードの漂う空間へとプロムナードを変えられる。

配置の間隔については、川辺や橋の上から眺める人々に、連続した照明のある空間の美しさを感じさせる程度が望ましい。具体的にはまちかど広場や宮の橋上の照明を参考に、約3メートルとする。

明るさについては、提案する照明は川の雰囲気にあったものでなおかつ橋の上から視認できるものであればよい。具体的には川岸での照明の標準的な光度である5~15ルクスとする。

照明器具の形は川面を眺めながら歩け、かつ大谷石の照明を眺められるように腰より低い程度の高さがよい。具体例としては文化庁「文化芸術による創造のまち」支援事業として行われた「らいとライトコンペティション 2006」の奨励賞にある「ARCHI LIGHT」(写真3 鈴木昇氏作)のような形状、高さが今回の提案に適している。価格としては、同程度の大きさのものが手作りにより大谷石照明を製作し販売する販売店において、1基当たりおよそ4万円となっている。

## II. 宮の橋における時計塔の配置

宮の橋(写真4)は田川の途中にかかる橋であり、立地的にはちょうど宇都宮駅西口前となる。人通りはとて多く、歩き疲れた人がベンチに座りながら話している姿もよく見受けられる。しかしこれといった特徴はなく地味な印象を受ける。そこでシンボルとなるものとして大谷石製の時計塔の配置を提案する。大谷石製の時計塔(写真5)は釜川沿いにも存在する。大谷石製時計塔は見た目にも新鮮であり、その新鮮さを宮の橋に持つてくることで橋のシンボルにもなり、多くの人の目に留まることにもなる。さらに、駅周辺付近の歩行者にとって時間を知る手段は日に3回鳴らされる時報のみであるので、駅周辺での利便性を高めるためにも、大谷石製時計塔を設置することは有効である。

## III. 宮の橋端部から田川プロムナードへの大谷石階段の設置

現在駅周辺から田川プロムナードへと下りる手段は、宮の橋から徒歩2分ほどに存在するコンクリート階段のみである。その階段は歩行者の通行量が多い場所からは遠く、視覚的にも階段を下りた時点では昇るための階段を確認しづらいため、駅周辺を通る人が気軽に下りられないという現状がある。また階段自体の数も少なく、いったんプロムナードへと下りると次に階段を上がるためには3~4分程度歩き続けることになり、面倒な場所という印象を持ちやすいのが現状である。そこで、現在は階段の存在しない宮の橋に田川プロムナードへと続く大谷石製の階段を設置することを提案する。具体的な場所としては写真6の宮の橋東端部を含めた4つの端部となる。宮の橋は先述のように通行量が多いのでこの位置からプロムナードへと下りることができれば、通行人はプロムナードに流れやすくなると予想できる。

以上の3つの提案を複合的に実施することにより、各提案は相乗的に効果を増す。現在宮の橋の東側には大谷石の公衆トイレがあるが、例えばその端向かいに大谷石製の時計塔を設置する。橋からは雰囲気のある大谷石製の照明の光が見え、橋に架かる大谷石の階段からは川沿いに下りることもでき、気軽にゆっくりと光と水の音を楽しむことができるようになる。橋から田川にかけての大谷石製品による一体感のある空間は、市民に憩いの場を提供するだろう。

<宇都宮駅西口前の田川プロムナードでの大谷石配置イメージ>

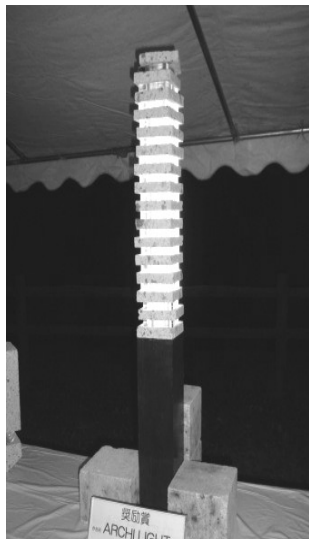
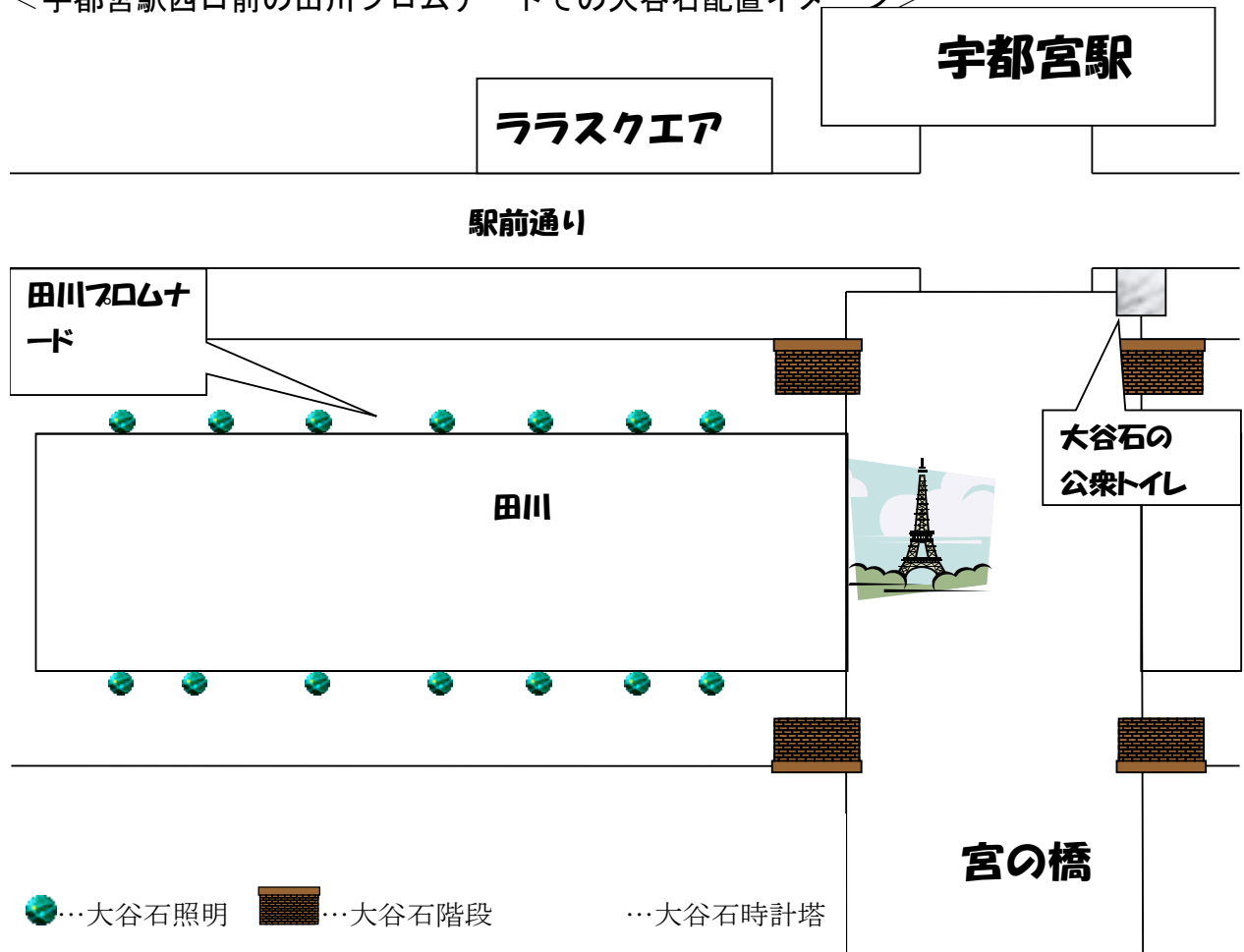


写真4 宮の橋



写真5 釜川沿い時計塔

写真3 鈴木昇氏作「archi light」



写真6 宮の橋東端北

## 4.2 八幡山公園内 日本庭園のライトアップ

### 4.2.1 なぜ八幡山公園内 日本庭園なのか

市中心部にある八幡山公園には約21万㎡の面積に約860本のソメイヨシノが植えられている。開花時期の4月初めから1週間程度の期間にはさくら祭が催され、毎年5万人以上の人々が訪れており、市では最大の花見スポットとなっている。この花見イベントは大谷石を市民に向けてPRする良いチャンスだと考えた。音やにおいなどの受動的でいても感じ取れる刺激を持たない石という素材は、ただ単に配置するだけでは人の意識には入っていきにくいものである。花見という人を惹き付ける要素に大谷石の照明を持ってくることによって、大谷石の存在やその魅力に気づいてもらいやすくなるのではないかと考える。

八幡山公園の花見スポットに隣接する日本庭園は池を中心に構成されている。池の周りには桜やツツジが植樹されており、その日本庭園を望むようにして5基のベンチが設置されている。しかし、日が暮れると周囲の高い外灯がぼんやりとあたりを照らすだけで、池周辺は暗くなり、その外観の美しさは隠れてしまう。また、さくら祭の時期であってもぼんぼりの点灯範囲ではないため池周辺まで積極的に足を運ぶ人は少ない。これではせっかく整備されているのにもったいないという印象を受ける。そこで、大谷石の照明を池周辺に設置することを提案する。

### 4.2.2 事業によって期待される効果

フェスタ in 大谷で好評を得た大谷夢あかりイベントに先んじて、石と明かりの組み合わせに注目し成功を収めたイベントがある。香川県高松市の「むれ源平 石あかりロード」である。このイベントは7月末から9月末の約2か月間、源平合戦で那須与一が扇の的を射たという歴史スポットを、約1kmにわたって地元で産出される庵治石で作った照明で照らすというものである。今年で3年目のイベントであるが多くの石材店や地域の各家庭が協力したこともあり、年々来訪者が増え7万人の来訪者を見込むイベントに成長している。このように石と明かりという組み合わせで成功している事例もあり、また大谷夢あかりが好評を得たという事実からも、大谷石の照明を設置した場合もその魅力・評価ともに高いものになると期待できる。

次に、八幡山公園の利用状況をみると、平成17年に市によって行われた市民アンケートモニター制度による意識調査から、花見時期の来訪者のうち約4分の1が普段公園を利用しない人であることが分かった。この利用者層が夜間にライトアップされた日本庭園を見て魅力を感じ、花見時期以外にも訪れるようになれば公園全体の利用者も増加する。

また夜間の八幡山公園では高さ89mの宇都宮タワーがライトアップされていたり、市の夜景が見渡せる橋(アドベンチャーブリッジ)が架かっていたりするなど、あまり注目されていないがデートスポットとしての魅力も持ち合わせている。池周辺での照明設置は夜間の公園の魅力を



増すことになり、これらの周辺施設との魅力と相まって、恋人たちというこれまで利用の少なかった層にとっての憩いの場になることも期待できる。

#### 4. 2.3 事業実施に当たっての具体的検討

まず、設置場所である。庭園の池周辺は池の西側のコンクリートの飛び石部分を除いて、全体的にツツジの株や桜、松が植えられている。ところどころにあるツツジが密生していて土部分が見えないところがあるが、そこを除いた場所に設置することとする。しかし、整備された道路などに設置するのとは違い、池周辺は凹凸や設置可能なスペースにばらつきがあるため必ずしも等間隔に配置できるわけではない。光が連続する間隔とスペースを考え検討した結果、設置が見込める場所は池の北側で 10 箇所、南側で 16 箇所ほどであった。

次に、どのくらいの光の強さが池の雰囲気や大谷石製照明と合うかを考察する。照明は、池の雰囲気を壊すものであってはならないと同時に、大谷石の持ち味である温かみを引き出すものでなければならない。照明器具に関しては市内中心地にある宇都宮城址公園内の園路灯を参考にする。宇都宮城址公園にある高さ 85cm(光源は高さ 65cm～)ほどの園路灯の光が、明るすぎず暗すぎず、また遠くからでも光が確認できる程度の光で、大谷石の持ち味を引き出す適当な光の強さだと判断したためである。

照明点灯費については、上記の宇都宮城址公園照明の点灯費を参考にする。点灯時間を八幡山公園内にある宇都宮タワーがライトアップされる時間と同じとした場合、季節によって多少変動するが、冬季の一日約 4 時間半が最大点灯時間となるため、4 時間半で試算する。明るさは上記の照明同様一基あたり 30W で、設置可能な場所すべてに設置するとすれば 26 箇所となるため、点灯費は  $4.5\text{h} \times 30\text{W} \times 26 \text{基} \times 365 \text{日} \times 11 \text{円/kw(法人、低圧契約)} = \text{約 } 14,100 \text{円}$  となる。

最後にデザインと照明製作費に関して検討する。宇都宮城址公園内では階段など足元を照らすために、一辺約 20cm の立方形の小型照明が使用されている。池周辺を照らすのに高さはあまり必要ではないため、今回はこの形を参考にする。自然のものである大谷石の価値相場は昔に比べて 10 倍以上と言えるほどに上昇しており、15cm 立方の大きさの照明だとデザイン・材料費・制作費込みで約 12,000 円という相場になっている。26 基設置するとなれば、 $12,000 \text{円} \times 26 \text{基} = 312,000 \text{円}$  となる。

## 5 まとめ

今回提案した大谷石設置案は、日常に溶け込みすぎて認識されていない大谷石の魅力を、新たな活用によって再発見してもらうためのものである。大谷地域は国の文化財、特別史跡、名勝指定を受けている大谷寺に加え、平成 18 年度に大谷の奇岩群が新たに名勝指定するよう答申されるなど観光地としての魅力はあるが、現在その人気は下火となっている。宇都宮市の資源である大谷石の魅力を再発見することは、低迷する大谷地域を後押しする重要な要素となる。中心市街地や人通りの多い場所で新たな大谷石活用を実施することは、より多くの人々に大谷石の魅力を知らせてもらい、大谷石を身近に感じてもらうきっかけになるだろう。今回の提案がそうした効果を生み出し、ひいては大谷地域を活性化させる一端を担えれば幸いである。